海外学生派遣事業実績報告書

文化科学研究科地域文化学専攻　伊藤 悟

海外派遣先国：　中華人民共和国 雲南省昆明市、および徳宏州
海外派遣先機関：雲南芸術学院
海外派遣期間：　2011 年 1 月 28 日～3 月 29 日

1. はじめに

私は中国雲南省の西部、徳宏州に暮らすタイ族の音のコミュニケーションを中心とする音文化を研究対象として、これまでに短期や長期のフィールドワークを数回実施し、博士論文執筆に関わるデータを収集してきた。現在は博士論文完成に向けて各章ごとの資料を整理し、考察を深めながら議論を練り上げているところである。

今回の渡航目的は、雲南省昆明市の雲南芸術学院においてタイ族のシャマンのうたや仏教書の誦経などに関する音楽学的構造分析の手法の学習と、タイ族村落での補足調査の実施であった。

スケジュールとして、平成 23 年 1 月 29 日から 31 日まで雲南芸術学院の張興榮教授から調査指導を受け、2 月 1 日～3 月 20 日まで雲南省徳宏州のタイ族村落にてフィールドワークをおこない、3 月 21 日～28 日までは再び張興榮教授から研究指導を受けながら、隔年で開催されている第 5 回雲南ドキュメンタリー映像展（YUNFEST）に開幕式と閉幕式の舞台監督およびボランティア・スタッフとして参加し、中国におけるインディペンデント映画や映像人類学的研究活動の動向を調査した。

2. 海外派遣先大学について

1959 年に設立された雲南芸術学院は中国西南地域唯一の総合的な芸術大学である。現在、雲南芸術学院では、演劇・地方劇学、音楽学、アートデザイン、芸術学、美術などの専門分野において修士課程が開設されている。教育機関の組織は、音楽学院、美術学院、舞踏学院、アートデザイン学院、演劇学院、社会人教育学院、文化学院という 7 つの学院―日本でいうところの研究科である―に分かれている。また、附属芸術高等学校も開設されている。中国における大学としての規模は決して大きいとはいえないが、現在の在籍生徒は約 7 千名、教職員は約 6 百名に及ぶという。

私の今回の渡航目的は補足調査に重点を置いていたため、また、ちょうど 2009 年より受け入れ機関である芸術学院のほとんどが昆明から車で 40 分ほど離れた呈貢という都市に移転を始めたため、古い校舎において中国人学生たちと一緒に授業を受ける機会はなかった。もっとも、私の昆明での滞在期間中は、雲南少数民族文化について音楽学的研究をおこなう張興榮教授の個人的な指導を受けることがひとつの目的であった。学校での授業を受けることはなかったが、張興榮教授が指導する修士課程の学生たちと交流の機会を持つことはできた。

張興榮教授は、雲南省の少数民族村落において文化大革命終了後から現在に至るまで毎年数回のフィールドワークを実施し、伝統音楽や芸能の記録と研究を続けている。私はこの派遣事業とは別で総合研究大学院大学より助成（全学教育事業）を受けて平成 22 年 12

月に国立民族学博物館にて中国・アメリカ・日本の研究者による国際シンポジウムを主催し、張興榮教授を招聘してシンポジウムで研究発表をおこなっていただいた。中国では民族音楽研究の第一人者のひとりである。

3. 海外派遣前の準備

私自身は海外における参与観察が研究の主な手法であったため、調査地の研究機関との交流には気を配ってきた。よって、海外派遣の手続きは順調に進めることができた。補足調査という位置づけのため、出発まではこれまでの調査で得られなかった資料をリストアップし、同時にこれまで得られた資料を整理する過程で湧いた疑問を携え、調査に臨んだ。

4. 海外派遣中の勉学・研究

昆明市の滞在期間中において、私は雲南芸術学院の張興榮教授の指導のもと、上座仏教儀礼の朗誦の旋律、さらにシャマニズムにおける儀礼うたの旋律に関して、音楽的構造分析に関する研究手法を学んだ。ただし、私の専門分野は文化人類学であるため、音楽構造の分析を博士論文の中心とはせず、補足的な資料の提示としてのみ用いる予定である。問題点として、やはり西欧の「音楽」概念を基盤とする音楽構造分析の手法は西欧音楽的視点からの理解に偏ってしまい現地の音の感性の理解に有効かどうか疑問が残ること、即興的なうたや誦経というバリエーションの総体である音文化を固定化してとらえてしまう危険性などを再確認した。

徳宏州における補足調査では、いくつかの仏教的儀礼に参加し誦経文の創作執筆や朗誦に関する実践を調査する機会に恵まれたが、シャマンの儀礼には参加する機会がなかった。今回の補足調査では、村落における社会関係の形成と維持について儀礼の場から考察すること、そして、研究協力者に師事して録音テキストや文字資料からタイ族のうたや詩などにおける押韻や聴取の感性に関する分析をおこなうことに重点を置いた。これらの成果は今後整理を続けて論文として発表したい。

海外派遣の最後の 1 週間は、多くの映像人類学やドキュメンタリー作品が出品される第５回雲南ドキュメンタリー映像展（YUNFEST）に参加した。私は第 2 回より毎回参加しているが、中国国内からの応募作品数は過去最高の 300 作品にのぼったという。ただし、そのなかでも授賞作品は中国の独特な事情を反映しているといえる。言論の自由が叫ばれるなか、インディペンデント映画は、政府や飼いならされたメディアが伝えない社会問題を扱う傾向がある。そのため、さまざまな社会問題をテーマにすえた作品が目に付き、そのなかでも特に構成や編集、社会的メッセージ性に優れた作品が審査員によって選ばれる。この傾向は中国ドキュメンタリーが流行している海外各地の映画祭と同様であり、それら中国の作品が授賞する内容をみれば納得することだろう。

一方で、中国では映像メディアを用いた伝統文化の保護や継承、あるいは発展という課題に積極的に取り組む NGO が多く見られる。YUNFEST は特に雲南の少数民族の人びとがカメラを手にしてテーマ捜をし、構成、撮影そして編集を一からおこなうプロジェクトを支援しており、それら作品を上映する数少ない映画祭でもある。

このように、滞在期間中は調査・研究および社会活動への参加というように非常に充実した時間を過ごすことができた。

5. 海外派遣費用について

およそ 60 日の海外滞在では、計画的に資金を用いたため、特に生活と研究の両面において支障をきたすことはなかった。農村部での調査は研究協力者への報酬を払うこと以外、特に大きな出費はなかった。ただし、これまでおこなってきた海外調査に比べ、昆明のような都市部では近年の物価高騰の影響から食費等の生活費の支出は増え、ホテルの宿泊費も高くなっている。

6. 海外派遣先での語学状況

研究の意義を問い続けるなかで、自分の研究がおかれている社会的文脈や経済状況に対して意識的になるならば、派遣先国や地域の人びととのコミュニケーションは日常レベルからその社会を理解するために必要不可欠だろう。中国では、「普通話」と呼ばれる漢語が標準語とされている。しかし、広大な中国では実に多くの方言と言語がある。

昆明市では、一般的に普通語は通じるが、日常生活では雲南方言を用いている。この方言は声調と発音の一部、慣用表現などが普通語と多少異なる。私が張興榮教授から研究指導を受ける場合と日常生活では中国語の普通語と雲南方言の両方を使用した。また、調査地であるタイ族村落ではタイ族語を使用し、調査地の町において漢人や他の民族の人びとと会話する場合には雲南方言を使用してコミュニケーションをとった。

以上のように、私自身の生活においてコミュニケーションは研究手段である。しかし、専門知識や伝統に根ざした言語表現、古い文書の読解などは現地の研究協力者の協力を得ながら理解を深める必要があった。

7. 海外派遣を希望する後輩へアドバイス

まず、募集が告知される前から、つまり普段より調査・研究の受入機関と連絡をとり、良好な関係を築いておくのがよいだろう。本事業の募集が告知されてから申請締切までの期間が短いため、告知がかかってからでは受入機関の承諾書などの書類を準備するには時間が足りず厳しいだろう。調査や研究はさまざまな協力があって成り立つことを考えれば、将来の研究を見据えて今から海外の研究者や機関との共同研究の基礎作りということを念頭におき、普段から交流を密にするとよいだろう。

このようなめぐまれた助成制度は是非積極的に利用して今後の研究生活を豊かなものにしていただきたい。